

とっても大事！ 内容項目の関連を考える



横浜国立大学教育学部附属
鎌倉小学校
根本 哲弥

1. 指導書を有効活用するために

「道徳の授業で何をしたらよいかわからない！」

「授業を進めるヒントがほしい！」

このような悩みの手助けとなるものが指導書ですね。今回は、先生方が指導書をもっともっと有効活用できるように、「道徳教師用指導書 活用術！」をご紹介しますことになりました。

指導書は1教材につき限られたページ数しかありません。しかしそこには、項目ごとに大切なエッセンスが凝縮されています。それらを理解することで、毎時間の授業が、より広がりや深まりのあるものとなり、そのような授業を続けていくことで、先生はもちろん、子どもからも「なるほど！」「いいなあ～！」「自分もよくありたい！」という声が聞こえてくる授業ができるのではないかと思います。

指導書の内容に沿いながら、
「Hop！ 内容項目の関連を考える」
「Step！ 展開例から発問、問い返しを考える」
「Jump！ 板書例から板書を考える」
に分けて連載していきます。それぞれ関連するものですので、つながりを意識して読んでいただけると幸いです。

2. 「関連性のある内容項目」って何？

指導書の「教材の道徳的意味(教材観)」を読むと、「関連する内容項目として」という文言があります。ここで、「関連する内容項目って何？」「1つの教材で1つの内容項目を考えていくんじゃないの？」「主たる内容項目が大事なんですよ？」という疑問が出てくるかもしれません。しかし、主たる内容項目と関連性のある内容項目を理解しておくことはとっても重要！ これら理解しておくことが、「なるほど！」「いいなあ～！」が生まれる授業に向けた二つの大きな手掛かりとなるのです。

一つ目は、授業のねらいが明確になることです。主たる内容項目と関連性のある内容項目を理解して教材を読むことが、広く深い教材理解につながるのです。学習指

導要領解説には、「具体的な状況で道徳的行為がなされる場合、「第2 内容」に示されている一つの内容項目だけが単独に作用するということはほとんどない。そこでは、ある内容項目を中心として、幾つかの内容項目が関連し合っている。」と示されています。つまり、教材は具体的な状況を描いているものであり、そこには一つの内容項目だけではなく、さまざまな内容項目が関連し合っているということです。そして、関連する内容項目の中でも中心となっている内容項目があり、それを光文書院では、主たる内容項目として位置づけています。このようなとらえ方をしたうえで教材を読むと、教材に描かれている道徳的な構造を理解することができ、「この授業で何をするか(ねらい)」が見えてきます。

2年生の教材『ぐみの木と小鳥』を例に考えてみましょう。この教材に描かれている小鳥からは、嵐の中でもぐみの実をりすに届けるという「努力と強い意志」や、よいと思うことを進んで行う「善悪の判断」、ぐみの木に対しての「感謝」、交流することで生まれる「友情、信頼」などについても考えることができます。しかし、これらの中心になっているものは、病気で苦しんでいるりすに思いを寄せて行動する「親切、思いやり」です(下記の図を参照)。ですから、主として「親切、思いやり」を手掛かりにして、〈困っている人がいたらじっとしてはいられない心から生まれた親切のよさ〉というねらいを立て、多面的・多角的に教材を読んでいくことになります。



また、内容項目はあくまで道徳的価値を考えるための手掛かりであり、内容項目を教えるのではないということもしっかりと理解しておくことが大切です。だって、間違った方向に向かう努力と強い意志や、思ったことを何でも正直に言うことが価値あるものとも言えませんよね…。

二つ目は、子どもたちの発言の意図が理解できることです。事前に内容項目の関係性を把握しておくことで、

子どもたちの多様な発言の意図をつかみやすくなります。そして、子どもの発言を生かしながら、ねらいに向かって意味づけたり、価値づけたり、板書で視覚化したり、問い返して広がりや深まりを図ったりしながら、子どもと一緒に授業をつくることができるようになります。

では、これまで話してきた内容について、実際の授業を通して考えたいと思います。

3. 子どもの発言を生かした授業例

『ぐみの木と小鳥』で、小鳥が嵐の中、ぐみの実をりすに届けたのはどのような心なのかを考えていきます。

- T：どうして小鳥さんは嵐にもかかわらず、ぐみの実を届けたのだろう？
C：ぐみの木さんのお願いを聞いてあげたかった。
C：ぐみの木さんからぐみの実をもらったから、お礼がしたかったんだよ。

この発言は、ぐみの木への「感謝」から生まれている要素が強いので、病気のりすを思いやり、じっとしてはいられない心から生まれた親切な行為について考えを深めるため、次の問い返しを行いました。



- T：お礼をするのが当然ということだね。それなら、嵐が止んでからでもいいのではないかな？
C：りすさんが病気でずっと寝ていて苦しそうだったから、助けたかったんだよ。
C：今日もりすさんが待っているかもしれないと思うと、早く行きたかった。
C：りすさんは一人ぼっちで寂しそうだったから、友達になりたかったんじゃないかな。
C：ぐみの実を届けるだけでなく、そのときにいろんな話もして楽しかったんだよ。
C：やさしい動物たちばかりだから、みんな仲良しになると思うな。
T：やさしい心を使える動物たちだね。りすさんの風邪が治った後は、どうなるかな？
C：今度はりすさんが助けてあげるよ！
C：みんなで助け合えるっていいなあ～！

この発言をきっかけにして、「親切、思いやり」から「友情、信頼」へと思考が広がっていきました。

このように、事前に内容項目の関連を把握しておくことで、子どもの発言の意図が理解でき、子どもの発言を生かしながらねらいに向かって、ぶれずに授業を進めていくことができます。

4. ねらいと評価

内容項目の関連を意識しながら教材を読むことで、教材を広く深くとらえることができ、「この授業で何をするか」というねらいを具体的に立てることができます。

具体的なねらいを立てることができれば、授業を振り返る際にも、ねらいと子どもの姿を重ねて分析し、具体的に評価をすることが可能になるでしょう。